

ある「ケース・ワーカー」の記録から

単車は、がけつぶちの林道を、唸りながら登る。だがこれも役場まで。先の部落までは役に立たない。谷あいの一軒家。炭焼きのおやじが、先月大ケガをした。困り果てた一家が目に見えるようだ。思ったとおり、小さな子供が4人も保護決定だ。医療、生活、教育の扶助手続を終わる。谷の一本橋で、おかみさんを見た。竹切りの賃仕事だという。おやじさんの入院中、あのおかみさんに仕事をみつけてやらねば……。



右・屋間は、ほとんど働きに出ている。訪問も山道で立ち話。



上・愛用の単車が唯一の足だ。



Tさんの担当区は、八代郡泉村である。泉村といえば、秘境として知られた五家荘をひかえた広大な山岳地帯。もともとケースワーカーの仕事に難易とてないが、ここ、泉村の場合、地形の特殊性、封建の名残りととどめた社会構成、異常に高い世帯人員数など、ワーカーの仕事に困難にする条件をいくつも抱えた特殊地域といえる。

ワーカーは、たいてい単車を使って、活動に機動性をもたせているが、五家荘はその単車の使用すら危険なのである。おまけに、この自然の地形の悪さは、そこに暮らす人々の働く条件を極度に悪くしている。せいぜい日稼ぎの山林労務。冬の積雪時は、働こうにも仕事は途絶えてしまうのだ。

ある異邦人

Tさんが今日訪問したのは、五家荘の入口、横手部落のある保護世帯。世帯主は韓国籍、妻は日本人という家族であった。戦争中から手をつけられた五家荘林道開発の工事には、かなりの数の朝鮮人労務者が動員された。五家荘林道がほとんど完成した今、なお、そのうちの何世帯かは、この地に住み付いているのだ。

仕事は、不安定な山林労務に、林道の災害復旧関係の労務。奥さんは白内障で、すでに右眼は失明に近いという。「御主人の仕事は順調にありますか。一何でも遠慮なく言って下さい。苦しいことは」

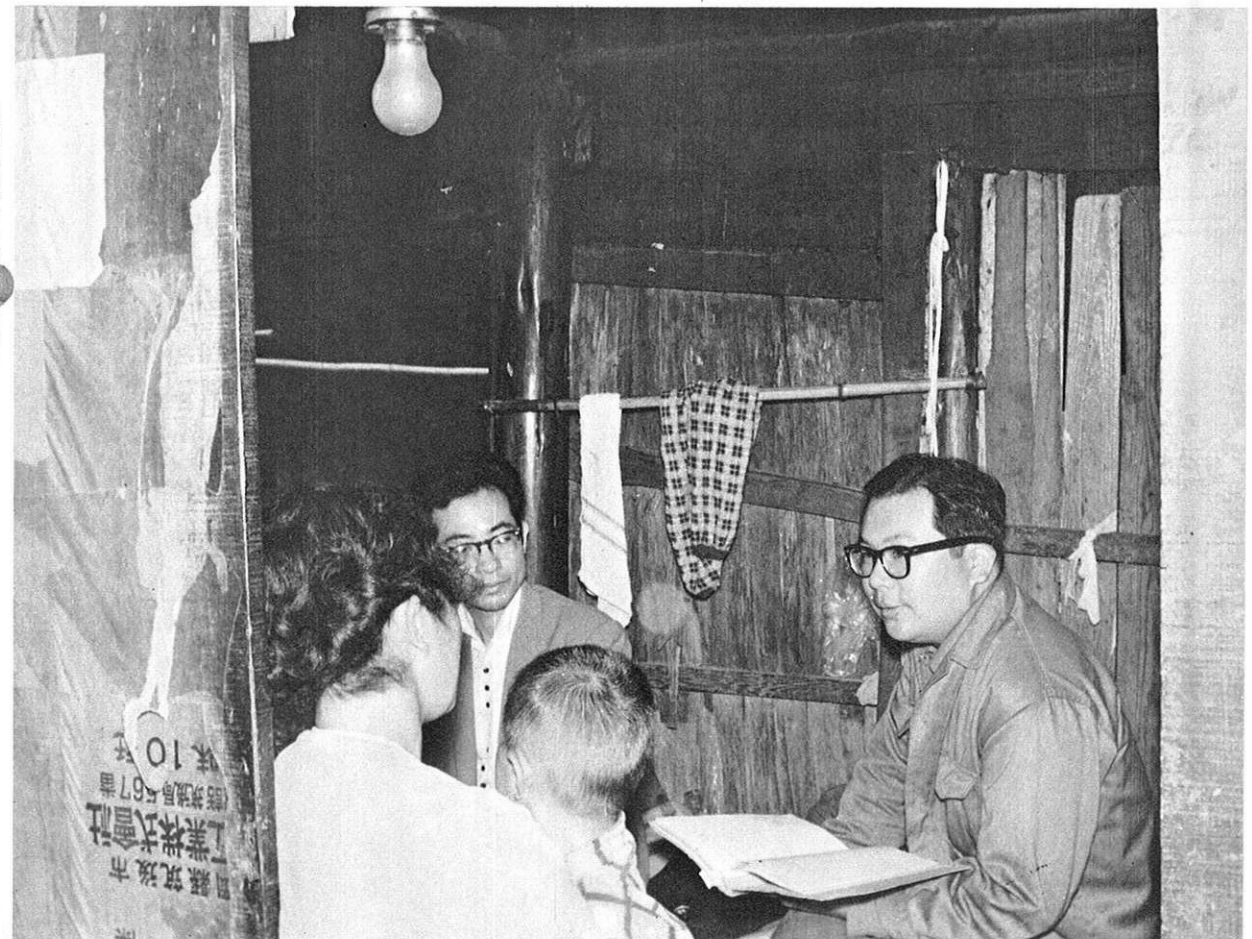
何でも話した方がいいですよ。」Tさんは、病院へ行くなら医療扶助で心配なく行けること、住宅補助は足りるかなど、できるだけ柔く話を引き出そうとする。訪れる民生委員、役場福祉係、そしてケースワーカー以外に、生活苦の悩みを吐き出す相手はいないのだ。親類からも冷い扱いをされているといふこの日本人妻の口は、最初目のように

<第一線の人々>
希望へのかけ橋
□ケース・ワーカー
八代・Tさんの場合

かたかったが、やがて、「自分たちのものはどうでもいいが、子供たちの衣類だけは何とかしてやりたい。」と控えめに話し始めた。

この家の主人は、十二指腸潰瘍で、死の寸前、医療保護で救われたという。ケースワーカーを見上げるこの異邦人の眼には、感謝の色が溢れていた。

かよい合う信頼感
ケースワーカーの仕事は、勿論、人間



生活の悩み一切 相談できるのはケースワーカーだけなのだ

相手の仕事だ。しかも、各人のプライバシーにかなり立ち入った問題である。だから、何よりもまず、お互い間に早く良い人間関係を作り出すことから始められるわけだ。厳しい生活苦にあえぐ人たち、そして例外なく病気がつきまといている。そういう、いわゆる社会の底辺にある人々の中には、貧へのおびえ、保護制度への無知などから、ワーカーととけ合わない。あるいは反撥するものもある。しかしワーカーは根気よく手をさし出し続けるのだ。それだけに、相互に信頼感が生れた、人間関係の通い合いがたしかめられた瞬間に、言い知れぬよここびを感じる。そして、ここからワーカーの仕事が本格的にスタートするのだ。そして、一日も早く生活を安定し、自立してもらいたいと願いながら、精一杯のアドバイスを、就職先のあつ施をと、かけ廻るのだ。

幅広い防貧対策を

こんなことがあった。もとブリキ工だったが、今五家荘の奥で炭を焼いている被保護世帯がある。Tさんは、八代職安に依頼して、岐阜のカン詰工場の職を見つけて出してきた。給与も悪くない。附属保育所、住宅付き。第一、各種社会保障がある。だが、別に土地を所有しているでもないのに、結局その世帯主は動こうとしなかった。若いTさんには、かたくななまでに現在の生き方に執着する人

たちの気持が理解し難かった。歴史的な、宿命ともいえる忍従の生活が、この土地の人々に貧困への抗体を作ったのかも知れない。しかし、Tさんはこんなことも考えた。福祉行政の最先端で、保護を行なうと同時に、さらに根本的な救貧、防貧対策が必要だと。例えば、この広大な山林に、関連産業を起し、もつと彼等の雇用の道を開くようにするとか、福祉施策の総合的なケースワーク制度とかが。

仕事、それが勉強

Tさんは、昨年この仕事に赴任したばかりのフレッシュマンだが、ケースワーカーの名のとおり、この仕事は、それぞれのケースごとに、それを千差万別、公式などありやうがない。勢い、事務所での日常業務が即、研究討論の場になるわけで、なかでもTさんの場合など、具体的な事例で徹底的に鍛えられていく。福祉第一線のベテランに囲まれて、若手ワーカーにとっては、恰好の修練の場になっているわけだ。係長は、直接上司でもあり、同時にケース指導の恐い先生だ。たしかに、複雑で多岐にわたる事例にぶつかるケースワーカーの場合、こいういった相互の研究、資料の交換が、彼等の仕事をより効果的にしているといえる。Tさんは、若さにものを云わせて、一番広い担当区域を、目下、懸命に走り廻っている。